

## 〈論 文〉

## 創造的再組織化のレジリエンス

## —サイクロンウィンストン被害とフィジー農村の対応過程—

高橋 玲

## Abstract

本稿では、サイクロン災害がフィジーのW村に与えた環境変化とその対応過程を、調査データの経年比較で考究する。過去最大規模のサイクロンウィンストンは、儀礼財「ヤンゴーナ」の供給不足と小売価格高騰をもたらし、儀礼の実践形式を変化させた。

本稿では、R.ファースの「インカルチュレーション」「再組織化」概念とP.ブルデューの「ハビトゥス」概念を援用し、「レジリエンス」概念の再解釈も試みる。個々人は手段—目的関係に応じて利用可能な資源の選択を行うが、複数の連続的選択は「組織化」を成す。環境変化で利用可能な資源構成が変化したとき、彼らは新たな型の選択を行う（＝インカルチュレーション）。それは個々人の「ハビトゥス」が導く偏倚的实践を含む。裁可された新たな型は、創造的な「再組織化」として描出される。災害への対応過程を表す「レジリエンス」は、「単なる原状回復」ではない、創造性を含む再組織化過程として解釈される。

**キーワード：**インカルチュレーション、サイクロンウィンストン、フィジー、再組織化、レジリエンス

## 1. 本稿の目的、方法、および諸概念

## 1-1. 目的

本稿の目的は、フィジー農村にもたらされた社会経済的インパクトと環境変化、そして新たな環境への対応過程で生じた諸実践の変化について、一農村におけるフィールドワークデータの経年比較を通して考究することである。

筆者は2002～2003年、および2019年に、フィジー共和国ナイタシリ県（Naitasiri Province）のW村でフィールドワークを行った。約17年が経過したW村では社会経済的環境の様々な変化が見られたが、その諸要因は、「漸次的かつ長期的な要因」と「突発的かつ短期的な要因」の二つに分類できる。

漸次的かつ長期的な要因には、市場原理や貨幣交換の浸透、生活インフラ整備、地域市場のグローバル化、地域的分業拡大、所得や生活水準の向上、などがある。例えば2019年のW村では、2002年には無かった電気が開通し、耐久消費財を中心とする消費熱が生まれていた。また、携帯電話の普及や高規格道路の整備により、人的交流や物的流通のありようが変化していた。近代化する社会経済的環境の中で、村人の中には、革新的感覚を発動させ新たな型の実践を生み出す者も現れた。ある者は、村で初めての「専門カンティーン（canteen）」<sup>1</sup>を始め、またある者は、輸出用としてより高値で売れる新種のタロ芋（taro）の栽培を試みている。

筆者は、漸次的かつ長期的な要因の考察を、すでに別稿[高橋 2020]で論じている。したがって本稿では、突発的かつ短期的な要因を扱う<sup>2</sup>。

突発的かつ短期的な要因には、自然災害や疫病の発生などがある。2016年2月20日にフィジーを襲った「サイクロンウィンストン (Tropical Cyclone Winston)」(以下「TCウィンストン」と略)は過去最大級の規模であり、W村は甚大な被害を受けた。この災害はW村の社会経済的環境に「乱れ」を起こしたが、中でも注目すべきは、フィジーの儀礼生活に不可欠の「ヤンゴーナ (yaqona)」に対する影響である。

ヤンゴーナは、胡椒科の樹の根を乾燥させ、細かく砕いた粉末を水で濾した飲料であり<sup>3</sup>、この用語は、「植物自体」と「植物から作られる飲料」の両方の意味で使われる。フィジーでは各種儀礼の際に、ヤンゴーナから作った飲料を「共飲」する。ヤンゴーナを一人で飲むことはタブーであり、伝統的作法に従い共飲しなければならない。村では夕方から夜にかけて共飲が行われるが、そこで展開する諸実践には、「マタンガリ (mataqali)」と呼ばれる社会組織の階層性や個々人の社会的役割など、村で共有されている価値体系が体现されている。また、村での共飲機会は、村内生活に関連する相談事や村で起きたできごとに対する意味付与、あるいは伝統的規範やタブーの確認の場としても重要な機能を担っている。

ところで2002年のW村では、共飲はほぼ毎晩、村の随所で行われていた。他方2019年には、その開催頻度と開催場所の数が減少していた。その主因は、TCウィンストン被害によるヤンゴーナ小売価格の高騰である。村では、「ヤンゴーナを購入できる者／できない者」の階層化が生じており、共飲の場に参加できる村人の数は限定的にならざるを得ない。そしてより重要なことに、「資力のある村人」は必ずしも、「伝統的ヒエラルキーで上位に位置する村人」ではないのである。ここに新たなヒエラルキーを内包した「ヤンゴーナ共飲を巡る価値」が再生産される余地がある。従来は、共飲の場に女性や子どもが加わることはタブーであった。しかし2019年には、必要な役割を果たす人員の数が欠如しがちであり、女性や子どもが代替的にその役割を果たすことが許容されつつある。

かつて村内での飲酒は重大なタブーであった。ただし、「酒を飲むこと」自体がタブーであったため、「酒の飲み方」をめぐる伝統的作法は存在しない。近代化に伴うタブーの弛緩と安価なビール価格を背景に、村内での飲酒習慣は増えつつある。飲酒に類するヤンゴーナの利用のされ方については後述する。

本稿では、突発的に生じたサイクロン被害というインパクトと、それに起因する「利用可能な資源構成の変化」を媒介項としながら、ヤンゴーナ共飲の場に現れた新たな諸実践の相を考察する。

## 1-2. 調査地と方法

本稿の調査地は、フィジー共和国ナイタシリ県W村である。筆者は博士論文[Takahashi2005][高橋 2008]執筆のため2002年5月から14か月間同村に滞在し、参与観察やインタビューなどによる質的調査を行った。また、2019年3月2日～3月12日、および、2019年8月26日～9月3日にも、同村で調査を行った。これらの調査データを経

年比較すれば、いわば「定点観測」の方法で、ヤンゴーナ共飲に対する彼らの実践の変化が見出される。

フィジー共和国の面積は 18,270 km<sup>2</sup>であり[外務省 HP (2019.8.2 閲覧)]、四国とほぼ同じである。フィジーでは約 10 年ごとにセンサスが実施されるが、その 2017 年版[Fiji Bureau of Statistics HP (2019.8.2 閲覧)]によれば、2007 年における総人口は 837,271 人、2017 年では 884,887 人となっている。経済は主に農業部門、砂糖部門、観光部門に基づいており、観光部門は長年にわたって最大の外国為替収入を得ている[Esler2016: 18]。

ナイタシリ県は主島ヴィチレヴ島 (Vitilevu) の中央を占める山間地域にある。その村々は、首都のスヴァ (Suva) へのアクセスが困難であるため、伝統的価値が比較的残存しているといわれる。W村はスヴァから約 60km の山間部にある。2002 年の村の戸数は 28、人口は約 200 人であった<sup>4</sup>。村には 4 つのマタンガリがある<sup>5</sup>。マタンガリは、フィジーの村社会における親族集団の一つであり、ほぼすべての社会生活はこの集団を単位として営まれる。W村における生業はほとんどが農業と酪農であり、わずかに、公務員、警察官、病院職員、教員などの給与所得者がいる。W村にスヴァに通勤する給与所得者はいない。この状況は、2019 年においても、2002 年当時と変わらない。2002 年当時、W村へ至る行程の大半は 1.5 車線の未舗装道路であり、スヴァからの所要時間は、乗用車で約 2 時間、バスで約 3~4 時間であった。しかし 2019 年には、高速運転が可能な 2 車線完全舗装の高規格道路がW村の約 2km 手前まで完成しており、スヴァからの所要時間は約半分に短縮された。2002 年にはサービスが無かった携帯電話および SNS は、現在では広く普及している。2019 年現在、村とスヴァの間での人的物的交流は頻繁になっている。

### 1-3. 概念

本稿では、社会経済的環境変化に対応する個々人の実践には偏倚が含まれるという点と、それらの諸実践の相互作用の中で新たな環境に対応する価値が再生産されていくという点を、R.ファース (R. Firth) の「インカルチュレーション (inculturation)」と「社会組織化 (social organisation)」、および、P.ブルデュー (P. Bourdieu) の「ハビトゥス (habitus)」概念を援用して分析する<sup>6</sup>。また、昨今の災害時などにもち出される「レジリエンス」概念についても、その新たなパースペクティブを提示する。

ファースは、ハリケーン被害がティコピア島 (Tikopia) <sup>7</sup>における社会組織化の変化を生み出し、それが社会構造の変革におよんだ点を指摘している[Firth1959]。ファースの立論は構造機能主義の影響下で行われたため、静態的な「社会構造 (social structure)」概念と、それを含む分析枠組を用いるという難点を孕んでいる。しかし同時に彼は、「利用可能な資源」「稀少性」「手段－目的関係」などの経済学的枠組を援用し、「ある状況で利用可能な資源の配置」に関して個々人が示す「蓋然的選択の差異性」を指摘した。個々人の行為選択は「手段－目的関係」から生まれること、手段を構成する「その時点で利用可能な資源の内容」は社会経済的環境に依存すること、目的は個々人に内在する価値体系に依存するためそれぞれの目的の内容は異なること、そして結果として、諸行為の型には標準からの「ずれ (gap)」が見られるものの、諸行為を構成する複数の連続的選択は一つの体系をなしていること、などを強調した[Firth1936: 34-35]。「手段－目的関係」に応じた

資源の配置が成す社会過程を、ファースは「社会組織化」と概念化した[Firth1961: 36]。また本稿では、ファースの指摘する「標準からのずれ」を表す術語として、筆者が従来概念化してきた「偏倚 (deviance)」を用いる<sup>8</sup>。

ここで指摘すべき点は、彼の分析体系における行為主体の積極的意義である。構造機能主義における行為主体は、その諸行為の目的が全体性の元に収斂するという意味で消極的であり、いわば埋没的である。換言すれば、行為主体は社会構造に合致するような行為を選択するという前提で捉えられており、社会変化の積極的な担い手とはみなされていない。ファースは「社会組織化」を概念化することで、この静態性を乗り越えようとした。社会組織化は、複数の行為主体の複数の選択から成っている。そして行為者は「利用可能な資源」の価値を認識し、資源を合目的的に配置する主体であるとされる。未知の文物がある社会にもち込まれたとき、個々人がその意味を能動的に解釈し自身の文脈に編入させる過程を、ファースは「インカルチュレーション」と呼んだ[Firth1936:

31][Takahashi2000]。社会組織化は、インカルチュレーションの連鎖が構成する過程である。諸実践の相互作用の中で社会的対流が生じた結果、従来とは異なる新たな型の社会組織化が生まれる蓋然性がある。ファース[Firth1959]の視点、つまり、平時の社会組織化を支える物質的環境ならびに社会経済的環境がハリケーン被害によって損なわれ、結果として、「被害後の状況下で利用可能な資源構成」に適合的であるような組織化の新たな型が現れたという視点は、突発的かつ短期的な要因による変化という本稿のテーマに援用可能である。

個々人の選択と実践の相には偏倚が見られる。そして、諸実践のうちのある型が、その場で正統性をもつものとして裁可される。しかし、物質的環境ならびに社会経済的環境に「乱れ」が生じると、行為選択に関する正統的図式が実現不可能になる場合がある。こうした状況下では、その環境変化に「適応できる個人／できない個人」<sup>9</sup>が現れる。この分析には、ブルデューの「ハビトゥス」概念が有効である。行為主体にはそれぞれ、生来的な性向が備わっており、さらに、過去の経験とそれらに対する客観的評価などが、ある種の心的構造として身体化されている。客観的社会構造が主観的心的構造として身体化された、行為主体のあらゆる実践を生成する母胎のことを、ブルデューは「ハビトゥス」と呼ぶ[ブルデュー1988: 83]。「乱れ」が生じた環境で妥当な選択を導く感覚は、個々人のハビトゥスから得られる。個々人のハビトゥスの差異は、環境変化に「適応できる個人／できない個人」という偏倚を生む。

本稿では、外的諸力による客観的《作用》と、それに対する個々人の主観的《反作用》の運動過程を、「主-客の連環」として捉える。具体的には次の過程である。要因としての外的諸力が地域社会の社会経済的環境にインパクトを加える。地域社会の個々人は、「利用可能な資源構成の変化」という《作用》を受けた新たな環境の中に身を置く。そこで彼らは《反作用》として、資源配置の新たな型を模索し、その環境下で妥当な行為を選択する。これがインカルチュレーションの過程である。複数の連続的選択は社会的次元に新たな相を示し、再組織化として結実する。

一般に、漸次的かつ長期的な要因としての近代化は、生存を目的とした際の「利用可能な資源選択の幅」を広げる。合理的かつ経済的な資源の選択と配置が可能になり、結果として、組織化に見られる地域の固有性は消失する傾向をもつ。他方、突発的かつ短期的な



要因がもたらす環境変化は、「利用可能な資源選択の幅」を著しく狭める。生存のためには固有の地域資源を配置する必要が生じ、結果として、地域社会に固有の価値観を色濃く反映させた組織化の様相が現れる。災害や疫病に対する各地域社会の対応が異なるのはこのためである。ただしその再組織化は、近代化によって地域社会の社会経済的環境に漸次的に追加されてきた、知、価値、インフラといった文物と、個々人がそれらに与えてきた新たな意味付けとの両方を反映させたものである。再組織化は、突発的環境変化以前への単なる「先祖返り」ではない。

近年の、外的諸力に起因する「作用－反作用」を表す術語として「レジリエンス」がある。レジリエンスは元来「物理的な外的諸力からのゆがみを跳ね返す力」を意味し、物理学で使われてきた。最近では、現状に対する復元力や回復力という意味で心理学に転じ、「個人が困難や逆境の中でも状況に合わせて柔軟に生き延びようとする力」として、災害とその復旧に関連する局面でも用いられている。他方、教育学、精神医学、老年学などの分野では、「個人が変化に対する適応力を新たに身につけることを目標とする」という文脈で使われることもある。しかし本稿では、「主観的側面に重きを置いた過程」ではなく、「主－客の連環を伴う運動過程」として、この概念を位置づける。ここでは、《作用》を受けた環境に身を置く個々人が、《反作用》として新たな偏倚的選択を行い、結果として新たな創造的再組織化が生まれる蓋然性に着目する。「乱れ」という制約下で「いつものふるまい」ができないときでも、人びとは、「そこにあるもので何とかする」ものなのだ。それは「いつもとは異なるふるまい」かもしれないが、「その状況では妥当なふるまい」といえるだろう。レジリエンスは、主観的次元における偏倚的資源配置のインカルチュレーションと、客観的次元における創造的再組織化を内在する、「主－客の連環」を伴った運動過程である。

サイクロンを扱う従来の研究は、主にマクロ指標の観点から、被害の現状とその回復過程に着目するものがほとんどである。災害で限定的になった「利用可能な資源の創造的配置」と、原状とは異なる型をもつ組織化出現の蓋然性を指摘する研究は少ない<sup>10</sup>。本稿では、TCウィンストン被害がもたらした「ヤンゴーナに関わる乱れ」に着目し、そこで現れた新たな組織化の諸相について検討することにする。

## 2. TCウィンストン被害に伴う突発的環境変化と実践の変化

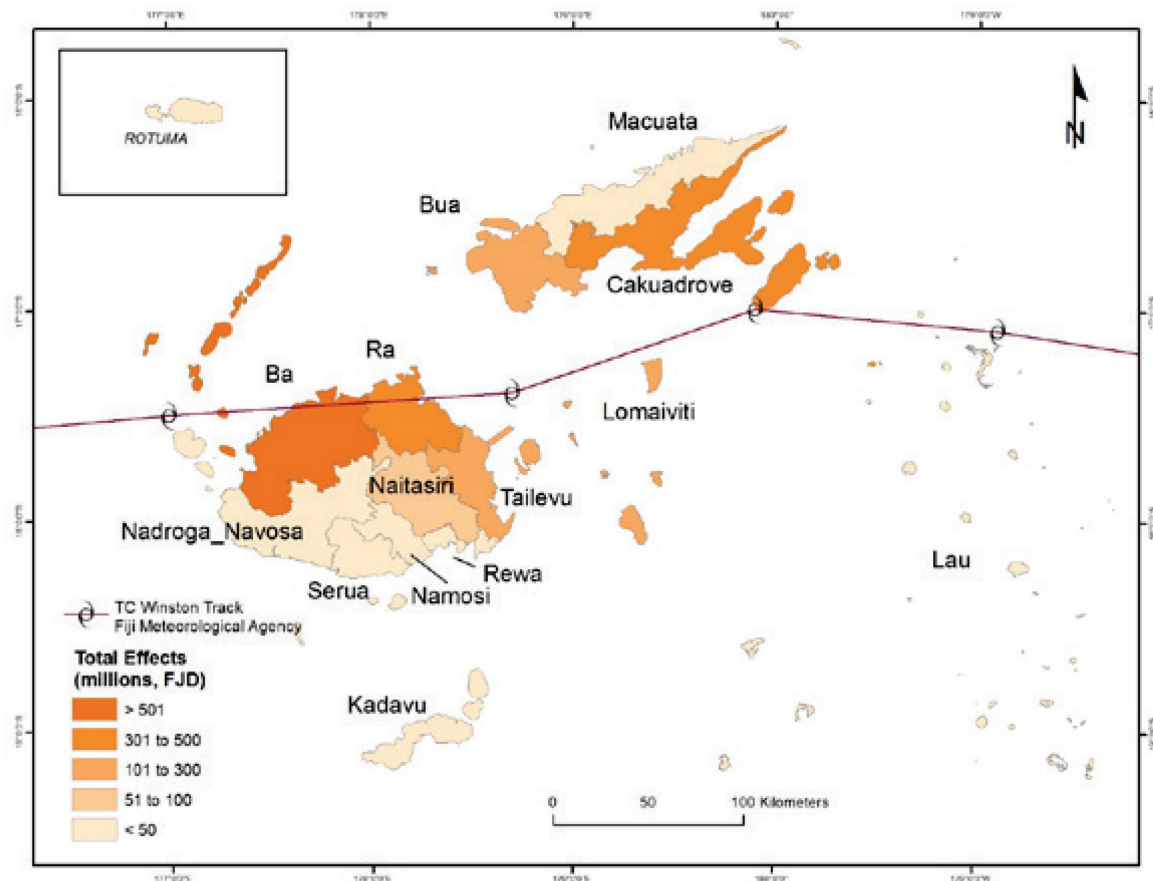
### 2-1. TCウィンストンの概要と被害

2016年2月20日、過去最大規模の「TCウィンストン」がフィジーを襲った。これは、フィジーに直接影響を与えた最初の「カテゴリー5」<sup>11</sup>サイクロンであり、南半球で記録された最も強力なサイクロンの一つとなった。ヴィチレヴ島上陸の直前にピーク強度に達し、平均風速は233km/h、最大瞬間風速は306km/hを記録した[Esler2016: 10][Winterford2018: 10]。

TCウィンストンは、フィジーの広範囲に甚大な被害をもたらした。図1は、フィジーの地理的被害状況を示している。最大の被災地は、イースタンディヴィジョンのラウ諸島(Lau)やロマイヴィチ諸島(Lomaiviti)、ウェスタンディヴィジョンのラキラキ(Rakiraki)やタヴァ(Tavua)、ノーザンディヴィジョンのタヴェウニ(Taveuni)やザカウドロヴ(Cakaudrove)であった[OCHA2016Mar31: 6]。全国で540,414人が被災

したが、これは総人口の 62%に相当する[Ministry of Economy, Republic of Fiji2016: 2]。44 人の死者が確認され<sup>12</sup>、家屋の破壊は 30,369 戸におよんだ[Winterford2018: 10]。

図 1 : Geographical Distribution of Disaster Effects by Province [Esler2016: 13]



2016 年 3 月～4 月に実施された政府主導の「災害後ニーズ評価 (PDNA)」は、災害による損害と損失を 19 億 8,000 万フィジードルと算出した[Ministry of Economy, Republic of Fiji2016: 3]。被災前年の 2015 年におけるフィジーの実質 GDP は 66 億 8,440 万フィジードルであり[FBoS2018]、これはその約 30%に相当する。2015 年 10 月に開かれたフィジー政府のマクロ経済委員会では、フィジーの GDP 成長率をそれぞれ、4% (2015 年)、3.5% (2016 年) 3.1% (2017 年) と見積もっていた。しかし TC ウィンストンが、住宅、輸送、製造、農業、電気、通信などの主要セクターに甚大な損害を与えたことを受け、PDNA チームは、2015 年のマクロ経済委員会の予測値を修正し[Esler2016: 25]、被災後の 2016 年の GDP 成長率予想を 1.3%へと引き下げた<sup>13</sup>。

農業部門全体の損失総額は、1 億 7,110 万フィジードルと見積もられた[Esler2016: 26]。フィジー政府の農業部門統計は、作物、サトウキビ<sup>14</sup>、家畜、漁業、森林という 5 つのサブセクターから成っている。例えばサトウキビ生産量は、2015 年の約 180 万トンに対し、2016 年には約 140 万トンに低下する見込みとされた[Esler2016: 26]。被災前年の 2015 年における農業部門の実質 GDP は 5 億 4,180 万フィジードルであり、総 GDP の

3.8%を占めていた。しかし 2016 年における農業部門の実質 GDP は 5 億 80 万フィジードルに落ち込んだ。これは同年の総 GDP のわずか 0.7%である [FBoS2018]。

フィジーの農村部と外島の人口の大部分は自給自足農業 (subsistence farming) に従事しており、商品作物栽培は有力な現金獲得手段である。農業生産と生活レベルが被災前のレベルに回復するには数年の時間を要するといわれた [Ministry of Economy, Republic of Fiji2016: 3]。T C ウィンストンは、ヤンゴーナ、タロ芋、キャッサバ (cassava) などの商品作物に大きな損失をもたらした。農産物ごとの損失では、ヤンゴーナ (55%) を筆頭に、タロ芋 (13%)、ココナツ (7%) が続いた [Esler2016: 49]。農作物被害は、野菜や根菜類のフィジー国内小売価格高騰を引き起こした。例えばフィジー人の主食であるキャッサバの小売価格は、災害前の F\$5 から F\$10 へと上昇した [Esler2016: 50-51]。各種農作物被害の中で、本稿では特に、ヤンゴーナに対する影響を取り上げる。

フィジー国内における商品作物としてのヤンゴーナ生産は、1950 年代の小規模プランテーションに端を発する [Pollock2009: 273]。その後 15 年間で作付面積は順次拡大し、商業生産高は、1990 年代の約 900 トンから 2017 年には約 9,000 トンへと増加した [Fiji Sun2018Jun15]。国内外での需要増を反映し、ヤンゴーナは現在、フィジーで最も重要な商品作物の一つである。

ヤンゴーナは何世紀にもわたってフィジー国内で栽培されてきた。しかし、生産流通消費の過程を統計的かつ包括的に分析した研究はなかった [Fiji Sun2017Aug17][Fiji Sun2018Jun16]。2018 年 6 月 14 日に、スヴァのフィジー博物館で報告された「バリューチェーン分析レポート」が、ヤンゴーナの生産統計を分析した初めての調査である<sup>15</sup>。それによると、フィジー国内のヤンゴーナ生産は、約 10,400 の生産者で始まり、自治体が開設する市場や専門店を通じて小売客に販売されている [PHAMA2018: 28]。生産者登録によると、ヤンゴーナ生産者の 64%は、ザカウドロウヴ、カ ندا ヴ (Kadavu)、ロマイヴィチ、ブア (Bua) という四県に集中している [Fiji Sun2018Jun15][PHAMA2018: 30]。

ヤンゴーナに含まれる「カヴァラクトン (kavalactone)」は「ラクトン (環状エステル)」の一種であり、抗不安薬や鎮静薬、睡眠薬としての効果があるとされる<sup>16</sup>。天然ハーブで上記の効能をもつヤンゴーナは、1990 年代後半から海外市場を拡大させており、ストレス不安、筋肉緊張、睡眠障害などに対するサプリメントとして、欧米やオセアニアなどに輸出されている [Baker2012: 240][PHAMA2018: 22][Tomlinson2007: 1067]。2016 年のヤンゴーナの輸出先では、アメリカ (94 トン、36.2%)、ニュージーランド (75.1 トン、29.1%)、キリバス (49 トン、18.8%) の三か国が全体の 84.1%を占めており、残りの輸出先は、マーシャル諸島やナウル、そしてサモアなどのオセアニア島嶼国である [PHAMA2018: 68-69]。欧米の製薬会社はヤンゴーナ製品を、柑橘系などの味付きタブレット、カプセル、スムージー、液体、ティーバッグ、真空パック、ヤンゴーナ入りパン、チョコブラウニー、などの形態で販売している [Baker2012: 250][PHAMA2018: 38][Singh2009: 110-111][Singh2009: 120-121][Tomlinson2007: 1067]ほか、アメリカにはヤンゴーナを飲ませるバーがあるという<sup>17</sup>。

オセアニア地域では古くより、医薬的目的というよりはむしろ儀礼的目的で、ヤンゴーナが消費されてきた [Abramson2005: 325][Singh2009: 107][Tomlinson2007: 1065]。フィジーでは、ゲストの歓待儀礼、通過儀礼、争議解決、過ちの償い、政治的妥結、霊力確

認、などの場合にヤンゴーナが用いられてきた。ゲストの歓待儀礼は「セヴセヴ (*sevusevu*)」と呼ばれる。これは、ゲストとホストのもつ差別的文脈の解消や統合を行う儀礼である。ゲストは、彼をその場に迎え入れた人間とともに、用意したヤンゴーナをホスト側へ贈呈しなければならない。それが受領されると、ゲストとホストがヤンゴーナを共飲する。これがセヴセヴである。ヤンゴーナは伝統的に、首長の即位式儀礼における象徴的な死と再生を司るものとされていた[Toren1990]。かつては、高位の首長のみが、儀礼で飲むことを許されていた。

しかし今日では、その伝統的意味が薄れるとともに、ヤンゴーナの日常的消費が一般化している[Abramson2005: 326-329]。そのため、国外需要だけではなく国内需要もまた増加しつつある。フィジーでは年間約 4,000 トンの乾燥ヤンゴーナが生産されているが、その約 95%は国内市場向けである[Fiji Sun2017Aug17]。国内需要の伸びによる供給不足を補うため、フィジーはヴァヌアツからヤンゴーナを輸入している<sup>18</sup>。

T C ウィンストンはヤンゴーナプランテーションに甚大な損害を与えた。深刻な供給不足は前例のないレベルの価格高騰をもたらした[Fiji Sun2018Jun16][PHAMA2018: 37]。小売価格高騰の要因として以下の四点が指摘できる。

第一に、慢性的な供給不足と旺盛な需要とが災害以前から存在しており、価格高騰の圧力は潜在的に強まりつつあった[Fiji Sun2017Aug17]。

第二に、ヤンゴーナという植物の特性である。ヤンゴーナは、高温と水ストレスの影響を受けやすいため、十分な育成に至る以前に気候変動を受けると、成長が著しく阻害される[PHAMA2018: 31]。

第三に、収穫に要する期間の長さである。例えばタロ芋は、通常 6~7 か月程度で収穫できる[Fiji Ministry of Agriculture2015b: 141]。タロ芋畑が被害を受けた場合、短期的には供給不足に陥るものの、中長期的には需給バランスの回復が期待できる。しかしヤンゴーナは、収穫までに 3~5 年という多くの日数を要する。そのため、ヤンゴーナ市場の需給バランス是正には長い時間がかかる。

第四に、栽培地域の限定性である。ヤンゴーナプランテーションは、気候的かつ物理的な要件が厳しく、また折々の手入れも不可欠なため、栽培に適した環境に限られる。結果として、ヤンゴーナ栽培地域は上述の四県に集約されており、このうちカンダヴ以外の三県は、T C ウィンストンの最大被害地域だった。

表 1 と図 2 は、ヤンゴーナの小売価格とその推移を表している。



表 1 : *Yaqona* Retail Prices in 2018 [PHAMA2018:37]

Product	Description	Retail Prices (FJD/kg)
<i>Waka</i> (根の細いところ)	Dried roots	100-150
<i>Lewena</i> (スライスした根茎)	Dried rhizome	80-120
Pounded <i>waka</i>	Powder	80-100
Pounded <i>lewena</i>	Powder	70-80
<i>Lewena kasa</i>	Cut pieces	60-70
White <i>kasa</i>	Stem	25-30
Black <i>kasa</i>	Stem	20-25
<i>Civicivi</i>	Peelings	15-20

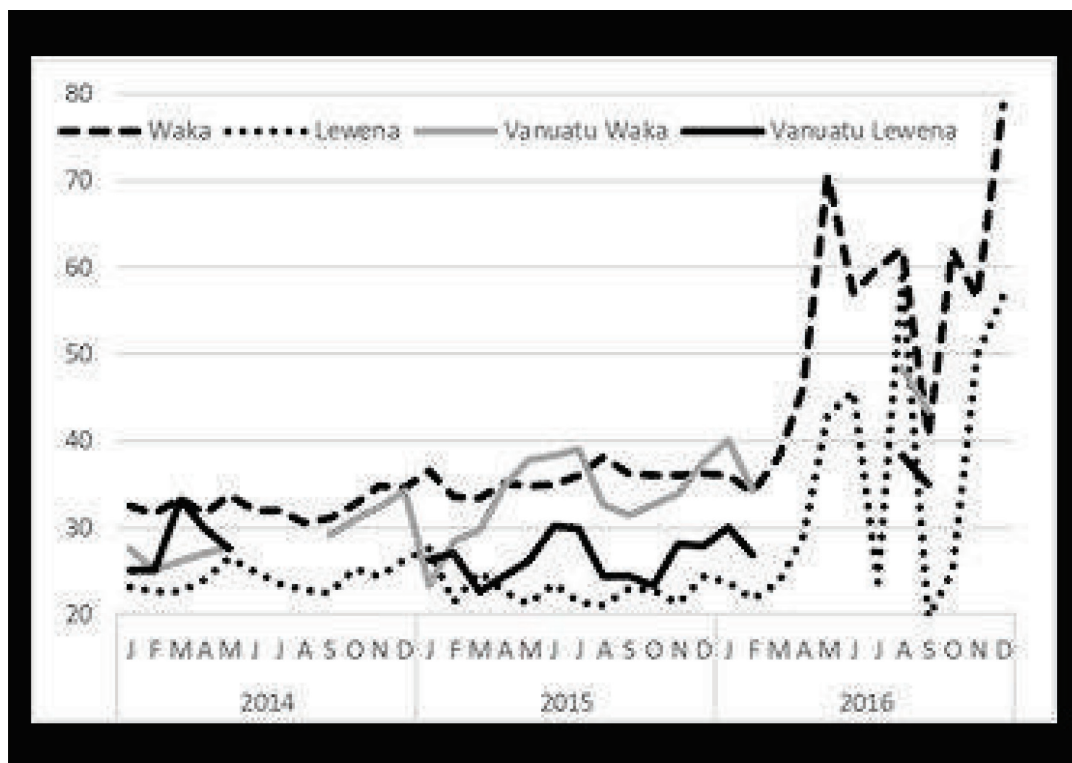
図 2 : Local Retail Market Prices for Kava, 2014-2016 (FJD/kg dry weight)  
[PHAMA2018:61]

図 2 を見れば、2016 年の TC ウィンストン 災害後の ヤンゴナ 小売価格急騰は明らかである。様々な成育段階の ヤンゴナ が被害を受け、深刻な供給不足が中長期的に継続する恐れがあった。ヤンゴナ 市場では、品質の悪い、未熟の ヤンゴナ の商品化が起きた<sup>19</sup>。しかしそれが抜本的解決になるはずもなく、サイクロン以前の「F\$30/kg」という水準をはるかに上回る、「F\$100/kg 以上」という小売価格を記録した。

ヤンゴーナは、タロ芋やキャッサヴァなどの通常の生活資料とは異なり、特殊な文脈で消費される儀礼財である。ヤンゴーナ供給不足という外的要因は、W村の社会経済的環境に対していかなる《作用》を与えたのか。そして、「利用可能な資源構成」が変化した環境の中で、W村の個々人は、《反作用》としていかなる実践を見せたのか。そこには経済学的マクロ指標では測ることのできない、極めて重要な組織化の相が見られた。

## 2-2. W村で見られた実践の変化

ヤンゴーナ共飲をめぐる実践の変化として、「共飲の場の減少」「共飲の場のタブーと役割の変化」「代替としての飲酒の増加」の三点が挙げられる。

第一に、ヤンゴーナ小売価格の高騰は、共飲のあり方を変えた。ヤンゴーナは儀礼財であり、その消費過程にはタブーや規範を伴う。その一つは「共飲」という形態である。一般的に、ヤンゴーナを単独で飲むことはタブーとされる[Pollock2009: 267]。飲もうとすれば、誰かを誘わなければならない。通常は自分の分に加えて、誘う相手の分までヤンゴーナを購入して持参する。後からその座に加わる者は、その座のすべての人間に十分に行き渡るだけのヤンゴーナをもち寄ることが期待されている。

2019年の調査で、肌感覚としてのおおよその価格変化を村人に尋ねたところ、2002年にはF\$40-50/kgくらい、2019年ではF\$100/kg以上という回答が多かった。W村ではヤンゴーナが栽培されていないため<sup>20</sup>、彼らの消費機会は市場価格の影響を直接受ける。飲みたければ、買わなければならないのである。以下は、筆者のインフォーマントの一人の語りである。

TCウィンストンの後、ヤンゴーナ価格はおそろしく高騰しました。村でも何人かは購入できますが、昔のように誰でもが購入できるわけではなくなりました。とても毎日飲むことはできません。W村ではヤンゴーナを栽培していません。タロ芋やキャッサヴァは、欲しければ作れますが、ヤンゴーナは、欲しくても購入するしかありません[2019年3月聞き取り]。

W村のヤンゴーナ共飲では、「頻度」「全体数」「参加人数」のそれぞれに減少傾向が見られた。例えば筆者が滞在する家やその近所では、2002年には、ほぼ毎晩のように共飲が行われていた。しかし2019年には、W村に滞在した7日間でわずか3回の共飲が行われたのみであった。また、「ある時間に村で共飲が開催されている場所の数」も減少していると感じた。最後に、「共飲の場の参加人数」も減少していた。2002年には、誰かがふらりと共飲の場にやってきて、そのまま座に加わることがごく頻繁にあった。最初は2人で始めたものの、お開きの際には10人以上になっている、というケースも多かった。しかし2019年には、「ふらりとやってくる人」自体が少なかった。正確に言えば、「ふらりと周辺を歩いている人」の数はさほど変わっていない。変わったのは、「自分がもち寄るべきヤンゴーナを購入した上でふらりとやってくる人」の数である。

以下は、筆者がヤンゴーナをふるまわれたシーンの観察記録である。2019年には、ヤンゴーナを馳走する行為が減少していることがわかる。

《村で観察されたシーン①：2019年に唯一「招待された」ヤンゴーナ共飲》  
村を離れる最終日の朝、筆者のインフォーマントの一人で、スヴァ在住のワイセ

アが自宅におり、筆者は彼の家に招待された。彼の家には弟のチウタもいた。二人は給与所得者であり、チーフマタンガリ所属である。彼らはすぐにヤンゴーナ共飲の準備を始めた。筆者はこのとき、ヤンゴーナを持参していない。2002年には、このような「持参せずともふるまってもらう機会」は頻繁にあった。筆者は外国人ゲストであり、持参は必ずしも義務ではない。しかし2019年には、「持参せずともふるまってもらう機会」は、これが唯一であった[2019年3月観察]。

第二に、共飲の場におけるタブーもまた、2002年と2019年とでは大きく変化した。一般にフィジーの村落社会では、ヤンゴーナ共飲の場に女性や子どもが加わることはタブーとされる[Abramson2005: 330][Singh2009: 111-112][Singh2009: 117][Tomlinson2007: 1066]。2002年のW村では、女性たちがこっそり隠れて飲むことはあったが、それはあくまでも「こっそりと」であった。しかしながら2019年には、男性の共飲の場に何人もの女性たちが同席しているばかりか、彼女たちは男性陣と同じように飲んでいて、また2002年当時、共飲の場にいた子どもは追い払われていたが、2019年には、座に加わって飲むことが許容されていた<sup>21</sup>。これは驚くべき変化である。

共飲の場における役割の変化も大きい。共飲にはいくつかの準備と役割がある。最初に、ワカ (*waka*) <sup>22</sup>やレウェナ (*lewena*) <sup>23</sup>を粉砕する。フィジーの村落にはたいてい、粉砕のための金属製器具がある。そこでは、共飲を裁可された年齢階梯で一番若い男性たちが、その力作業を担う。次に、粉末のヤンゴーナを布製の袋に入れ、水をかけて揉み出す。その際、揉み出された液体を受ける「タノア (*tanoa*)」と呼ばれるボウルを用意する。参加者全員に行き渡るだけの十分な量が準備されると、親族集団の出自、年齢、婚姻状況、などに基づく社会的地位を反映した位置に全員が座る。ホスト側の高位の人間が2〜3人、タノアの一方を囲んで座り、ゲストやその他の参加者は、高位の人間たちとタノアを挟んで対面するように座る。その後、社会的地位に応じた順番でヤンゴーナを飲むことになる。高位のホストがココナツ製カップでタノアからヤンゴーナを掬い、給仕役の若い男性がもつ別のココナツ製カップに注ぐ。彼はそれを参加者のところに運び、参加者に渡す。飲む順番は参加者全員の社会的地位を示しており、最後に渡される人は最低位ランクの者ということになる[Singh2009: 112][Tomlinson2004: 658]。

2019年には、これらの役割に変化が見られた。ワカやレウェナを粉砕する役割、水で揉み出す役割、タノアからヤンゴーナを掬って渡す役割を、女性や子どもが担うことがあった。そして重要なことは、女性や子どもがヤンゴーナ共飲における社会的地位を獲得し、成人男性に交じってヤンゴーナを飲んでいて、ことであった。

#### 《村で観察されたシーン②：筆者が持参したヤンゴーナの扱われ方》

筆者は事前に購入した1kgのワカを村へ持参した。ある成人男性が共飲のコーディネーターとしてそのワカを扱う。粉砕作業は彼の指示で、若者ではなく子どもが行った。水で揉み出す作業は、共飲が行われる筆者の家に住む、筆者の「姪」<sup>24</sup>にあたる女性が行った。村の現首長を含む成人男性3人がヤンゴーナを持参し、共飲が始まった。コーディネーターの男性は宗教上の理由からヤンゴーナを飲まない<sup>25</sup>。粉砕作業をした子どもや揉み出す作業をした女性もヤンゴーナを飲んだ。彼女は、タノアからヤンゴーナを掬って渡す高位の役割も果たしていた。その後何人かが共飲の座に加わったが、ヤンゴーナを持参した者はいなかった。最終的な参加者は、成人男性4人、女性4人、子ども2人であった。ヤンゴーナを持参する者がおらず量が足りなくなったため、2002年時より圧倒的に短い時間で共飲が終了した[2019年3月観察]。

第三に、村内における飲酒の増加も、2019 年に見られた重要な変化である。フィジー村落では一般的に、飲酒はタブーである。2002 年のW村では少なくとも、飲酒の痕跡が目立つことはなかった。しかし 2019 年のW村では、村のゴミ捨て場だけではなく道端などにも、ビールの空き瓶が散乱していた。フィジーのビールは安価である。村人でも十分に購入できる価格である。

### 3. 考察と今後の課題

#### 3-1. 考察

TC ウィンストンはヤンゴーナプランテーションに甚大な損害を与えた。災害による輸出減とそれに伴う経済的損失、生産回復に要する日数、あるいはそのための障害などを扱うマクロ経済的分析は数多く見られる。しかし本稿では、単なる消費財ではなく、儀礼財としての意義をもつヤンゴーナの小売価格高騰が、W村における組織化の変化を引き起こした点を考察する。

上述のように、W村で見られた変化は、「共飲の場の減少」「共飲の場のタブーと役割の変化」「代替としての飲酒の増加」の三点である。

第一に、ヤンゴーナ小売価格の高騰により、「ヤンゴーナを購入できる者／できない者」の階層化が生じた。この背景には、村人たちの社会経済的生存条件における格差拡大がある。2002 年のW村では、わずかな給与所得者を除けば、村人の収入水準にさほどの格差はなかった。しかし、スヴァへのアクセス向上と通信手段の発展に伴い、スヴァを含む都市部で就学や就労の経験をもつ者が増えた。また、市場経済に関わる情報が増加しており、情報を文化資本として活かすことで象徴的かつ経済的利潤を「獲得できる者／できない者」という格差が生じた<sup>26</sup>。実収入や貯蓄額などは今後の調査で明らかにするつもりだが、村では明らかに、経済的階層化が進んでいる。電気開通後の、耐久消費財や電化製品の所有状況は家々で全く異なる。可処分所得の格差は広がりつつあるのである。かつてヤンゴーナはそれほど高価ではなく、誰もが購入可能な財であった。少なくとも、日常の消費分を躊躇せずに購入できるだけの価格水準にあった。しかしサイクロン以後の小売価格高騰と格差の進行で、ヤンゴーナはもはや、誰もが購入可能な財ではなくなった。

これは、W村のヤンゴーナ共飲における「利用可能な資源構成の変化」を意味する。外的諸力による《作用》を受け、村人たちは、「乱れ」が生じた環境に身を置くことになった。個々人の経済的状況やハビトゥスに応じて、彼らは、《反作用》としての偏倚的实践を選択した。例えばある者は、従来通りに皆の分までヤンゴーナを購入して座に加わる。ある者は、持参はしないが座には加わる。そしてある者は、持参できないので座に加わることを控える。またワイセアやチウタのように、ゲストにヤンゴーナを馳走する者も依然として存在する。彼らは給与所得者であるため、可処分所得が潤沢なのだろう<sup>27</sup>。

ヤンゴーナに対する彼らの解釈や価値付けにも差異が生じた。「共飲の場に加わるならばヤンゴーナを持参するべき」という価値観は、共有されてはいるものの、厳格な規則ではない。ブルデューが指摘するように、「結果として」の諸実践は規則的かもしれないが、「事前に」諸実践を統御する規則は存在しない。共飲の場に加わりたいという欲求と自らの懐具合とを天秤にかけ、彼らは新たな妥当性を模索しつつ判断と選択を行う。そこ



には、従来の諸実践に見られた規則性からの、ある種の揺らぎがある。高騰したヤンゴーナでさえも未だ「利用可能な資源」である人びとは、「座に加わる際には持参する」「招待した人には気前良く馳走する」などの実践を続けようとする。他方、もはや「利用可能な資源」ではなくなった人びとは、「持参せずに座に加わる」あるいは「持参できないので座にも加わらない」という実践を選択する。前者は、従来の正統性から偏倚した実践である。これが裁可されるかどうか、換言すれば、これが新たな正統性を獲得するかどうかは、今後の観察が必要だろう。後者は、従来の正統性を頑なに遵守しようとする態度を含む実践である。この両者を分かちつものは、個々人のハビトゥスに起因する実践感覚である。直感的に言えば、前者の選択にはある種の狡猾な性向が、後者の選択にはある種の律義な性向が、それぞれ垣間見える。ただし、個々人の差異的経験を含む「構造化された構造」としてのハビトゥスもまた、そうした選択を導出する母胎となる。ヤンゴーナ共飲をめぐるインカルチュレーションは、個人的次元における偏倚的諸実践のせめぎあいの中で現出した。そして社会的次元には、ヤンゴーナ共飲の場をめぐる新たな型の組織化が生まれた。

第二に、「利用可能な資源構成の変化」は、近代化に伴うタブーの弛緩と相まって、「役割の変化」という新たな組織化をもたらした。本稿では、女性と子どもに関する役割とタブーを例示した。2019年のW村では、ヤンゴーナを粉砕する役割やそれを掬って渡す役割などを、従来はタブーとされた女性や子どもが担う場面が見られた。一般に、近代化が進むと、伝統的タブーは弛緩する。首長の世代交代が進み、近代的で合理的な価値観をもつ世代が首長になっている現在では、タブー違反に対する厳格な指導は従来ほど見られなくなっている。W村においても、筆者の「父」や「叔父」にあたる前世代の首長たちは、スヴァへ出かける機会も少なく、給与所得者の経験もほとんどなかった。他方、現世代の首長たちは、気軽にスヴァへ買い物に行くし、給与所得者の経験をもつ者も多い。都市生活の経験は、合理性を内包する資本主義のハビトゥスを身体化させるきっかけになる。また、近代化の進行は、生存を目的とした際の「利用可能な資源選択の幅」を広げる。資源を合理的に配置する選択肢の増加は、伝統的価値観に基づく規範の力を弱める。W村でも、タブーの一般的弛緩傾向は顕著である。役割についてのタブーにも揺らぎが生じていることは推察できる。

タブーの一般的弛緩傾向とは別に、「利用可能な資源構成の変化」が与えた特殊的影響も指摘しなければならない。価格高騰したヤンゴーナが「利用可能な資源である者／そうでない者」という階層化は、共飲の場で役割を担うべき人びとがヤンゴーナを購入できない事態を引き起こした。粉砕する役割を担うべき若者や、ヤンゴーナを掬って渡す役割を担うべき高位の成人男性などが、その場に不在となる可能性が生じたのである。伝統的階層化と経済的階層化がそれぞれ別に進行しつつあるW村では、双方の階層における高位の者が一致するわけではない。例えば、別稿[高橋 2020]で指摘したように、W村で唯一のトラクターを所有するなど資本蓄積に成功しているモセセは、高位のマタンガリ所属ではない<sup>28</sup>。また、カンティーン経営を成功させているライサニは、高位のマタンガリ所属ではあるものの、その成功の背景には、持ち前の性向、受けた教育、長年のカンティーン経営で培った独特の洞察力、などから構成される彼女のハビトゥスがある。異なる階層化の併存は、共飲の場における「適材適所」を困難にしている。

この状況もまた、「利用可能な資源構成の変化」を表している。つまり、共飲の場に必要「人的」資源を利用できない状況は生じ得る。この《作用》の中に身を置く彼らが、周辺にいる女性や子どもを「代替的に利用可能な資源」とみなす《反作用》は蓋然的である。従来の型で資源配置ができないときに、資源配置の偏倚的かつ創造的な型が選択され、それが妥当であるとみなされる余地はあるのである。力仕事に耐えうる身体をもつが未だ成人には分類されていない、いわばマージナルマンとしての子どもならば、代替的利用に対する支障の度合いが小さいという判断はあるのかもしれない。また、自宅を共飲の場に提供したのだから、彼女がその座に加わることは妥当であるという判断もあるのかもしれない。タブーの禁忌力が十分に効いていた従来であれば、この代替的利用が裁可されることはおそろくなかっただろう。資源配置におけるこの偏倚的な型が正統性を獲得することはなかっただろう。しかし、タブーの一般的弛緩傾向が顕著であり、かつ、「利用可能な資源構成の変化」が見られた2019年の共飲の場では、この偏倚的实践を裁可するというインカルチュレーションが見られ、役割に関する新たな組織化が現出したのである。

第三に、「利用可能な資源構成の変化」は、「代替としての飲酒の増加」という組織化の型をもたらした。当然この背景にも、タブーの一般的弛緩傾向がある。フィジーの村では一般に、村内での飲酒はタブーである。2002年に筆者が調査した別の村では、村内での飲酒はすでにかなり一般化していた。その村はスヴァに近く、スヴァに通勤する給与所得者も多かった。近代化に伴うタブーの一般的弛緩は当時からかなり進んでいたのだろう。ただし同じ2002年のW村では、村内での飲酒などもってのほかであった。隠れて飲む者はいたが、首長世代の目が常に光っており<sup>29</sup>、禁忌は厳格に守られていた。しかし2019年には、W村の各所にビールの空き瓶が散乱しているありさまであった。村人の多くは「今もタブーだけどみんな飲んでいるよ」などと語っている。役割変化と同様、飲酒に関しても、タブーの禁忌力の弱まりが飲酒の増加を生むという因果関係はあるだろう。

ただしそれとは別に、「利用可能な資源構成の変化」によるインカルチュレーションを指摘する必要もある。ヤンゴーナは欧米で、ストレス不安、筋肉緊張、睡眠障害などに対するサプリメントとして重用されていることはすでに述べた。ヤンゴーナを飲むとある種の酩酊状態に陥る。アルコールのように自律神経の興奮や交感神経の刺激を引き起こすことはないが、少量の摂取で気持ちをリラックスさせるという類似の効果がある

[Tomlinson2007: 1065-1066]。人びとのヤンゴーナ共飲に対する欲求はここにもある。彼らは「酔いたい」のだ。今や、ヤンゴーナは高価すぎて購入することが難しい。一方で、フィジーのビールは安価である。ヤンゴーナ共飲には規範とタブーがある。一方で飲酒には、飲酒自体はタブーだが、「どのように飲むべきか」を方向付ける規範やタブーはない。酒の飲み方は、いわば価値自由なのである。加えてビールは購入財である。2002年のW村では、ビールの購入は容易ではなかった。しかし2019年では、スヴァなどの販売店へも容易にアクセスできるため、資金があれば購入はできる。タブーの一般的弛緩に加えて、安価なビール、価値自由な飲み方、購入難易度の低下という《作用》がもたらした環境変化の中で、彼らは様々な判断と選択を行った。ある者は、「依然として飲酒はタブーなので控えるべき」と判断し、またある者は、「もはやタブーではないので大っぴらに飲んでも差し支えない」と判断した。酔うという目的達成の代替的手段として、「利用可能な資源」の中からビールを選択したのである。これは、外来の文物としてのビールを彼ら

の文脈に新たな意味付けで編入する、《反作用》としてのインカルチュレーション過程であるといえよう。

### 3-2. 結論と今後の課題

今後の課題としては、レジリエンスと個人化というテーマが挙げられる。

インパクトによる環境変化と、それに伴う「利用可能な資源構成の変化」の要因は、災害に限られるものではない。IT 技術の進展に伴う情報過多や進行する経済的階層化、別稿で論じた漸次的かつ長期的な要因なども、様々な客観的《作用》をもたらすだろう。

ここでは「利用可能な」という点が重要である。近代化によりモノや知が溢れる状況において、雑多な集合から「利用可能な資源」を拾い上げることができるかどうか。価値中立的なそれらの中から「積極的な意味と弁別的価値を付与することが可能なモノや知」を選び取る感覚を身に付けているかどうか。それを実現するための認識力、洞察力、判断力などの有無が、個々人が行う創造的あるいは革新的な《反作用》の内容を方向付けるとともに、局面におけるインカルチュレーションのありようを決定する<sup>30</sup>。ある者は、自らのハビトゥスが与える創造的感覚でそれらを文化資本として活用し、革新的実践を生み出していくだろう。またある者は、旧弊に囚われたままの判断を続け、従来の図式のまま実践を重ねていくだろう。

環境に対するインパクトが、「慣行の軌道」に則っていた社会にある種の「乱れ」を起こす《作用》をもつ。「乱れ」に対する《反作用》として個々人は偏倚的实践を選択する。それらの相互作用はインカルチュレーションを構成し、組織化の新たな型が正統性を獲得する。結果として、社会に再び「定常状態」が訪れる<sup>31</sup>。「定常＝慣行－乱れ－新たな定常＝慣行（革新）」というこの一連の運動過程は、「主－客の連環」を内包するレジリエンスの新たな解釈として捉えることができるだろう。社会が「乱れから回復する」ということは、「元の慣行の軌道へ戻ることを意味するものではない。新たな文脈で行われる資源の創造的配置とそれを伴う組織化は、換言すれば、インパクトに対する「個人－社会」の適応過程なのである。適応は偏倚を含み、ときに革新へと昇華する。そしてこの分析枠組は、グローバル化の中で様々なインパクトに晒されながらも固有の適応過程を現す地域社会の分析に対して、有効なパースペクティブを示唆している。

近代化は、伝統的タブーの一般的弛緩と同時に、個人化の過程を内包している。ヤンゴーナ共飲と飲酒をめぐるW村の組織化の中には、これら二つの趨勢が看取された。ヤンゴーナ共飲の局面にはタブーの弛緩が顕著だが、タブーが完全に消滅しているわけではない。ヤンゴーナ共飲の誘因には、酔いを得るという生理的目的だけではなく、こじれた人間関係を修復させたり、村の問題を共有したり、あるいはその解決策を相談したりという社会的目的もある。共飲は社会的行為なのである。酔うことのみが目的ならば、好きなときに好きな場所で一人で飲むという実践が生まれるかもしれない。しかし、社会的目的を内包しているからこそ、ヤンゴーナ共飲が個人化する方向性は弱められる。共飲をめぐるタブーは、弛緩しつつも、完全に消滅することはないだろう。

しかし飲酒は、個人的行為である。それは、酔いを得るという生理的目的のみをもって。酒の飲み方は価値自由であり、タブーの複雑な網の目からは解放されている。伝統の保存は個人化と正反対のベクトルにある。伝統の力が弱まれば、個人化は進行する。近

代化は個人主義と親和性が高い。飲酒自体を禁ずるタブーがひとたび弛緩すれば、飲酒習慣は一気に広がるだろう。ただし、ヤンゴーナ共飲の生理的機能は飲酒で疑似的に代替可能だが、ヤンゴーナ共飲の社会的機能は代替不可能である。ヤンゴーナ共飲の場が減じ、それらが飲酒に置換されたとき、共飲が果たしていた社会的機能はどのように代置されるのか。今後は、コミュニティの切断と飲酒の関係性についても、検討が必要である。

残された問題としては、教育と文化資本、あるいは、人権とタブーなどが挙げられる。村では子弟の高等教育に対する関心が高まっている。教育で得られた知識や技術はさらなる階層化を生むだろう。また、女性のヤンゴーナ共飲機会が増えたのは、現政府が積極的に進める人権政策<sup>32</sup>の影響だという指摘もある。政策は個々人の意識構造を変革させ、資源利用についての認識を一変させる可能性をもつ。これらに関しては、全戸調査の質問票や追加的インタビューなどを行い、継続的に検討していくつもりである。

## Bibliography

- Abramson, A.** (2005), 'Drinking to Mana and Ethnicity: Trajectories of Yaqona Practice and Symbolism in Eastern Fiji,' *Oceania* 75(4): 325-341.
- Aporosa, S. et al.** (2014), 'Kava Hangover and Gold-standard Science,' *Anthropologica* 56(1): 163-175.
- Baker, J. D.** (2012), 'Pills, Potions, Products: Kava's Transformations in New and Nontraditional Contexts,' *The Contemporary Pacific* 24(2): 233-265.
- Bakker, M. L.** (2014), *Naitasiri: a profile of the demographic and socio-economic characteristics of the population of the province based on the 1996 and 2007 census data*, Fiji Bureau of Statistics.
- Bourdieu, P.** (1977), *Algerie 60*, Paris: Éditions de Minuit. (原山哲訳『資本主義のハビトゥス—アルジェリアの矛盾—』藤原書店, 1993年)
- Bourdieu, P.** (1979), *La Distinction: critique sociale du jugement*, Paris: Éditions de Minuit. (石井洋二郎訳『ディスタンクシオン—社会的判断力批判 I』藤原書店, 1990b年; 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン—社会的判断力批判 II』藤原書店, 1990c年)
- Bourdieu, P.** (1980), *Le sens pratique*, Paris: Éditions de Minuit. (今村仁司他訳『実践感覚 I』みすず書房, 1988年; 今村仁司他訳『実践感覚 II』みすず書房, 1990a年)
- Chaston, R. K, et al.** (2016), *Impact of Tropical Cyclone Winston on Fisheries-Dependent Communities in Fiji, Report No. 03/16*, Suva: Wildlife Conservation Society.
- Esler, S.** (2016), *Post-Disaster Needs Assessment: Tropical Cyclone Winston, February 20, 2016*, Government of Fiji.
- FAO** (2016), *Fiji: Tropical Cyclone Winston SITUATION REPORT – 4 March 2016*.
- FBoS** (2018), *FJI'S GROSS DOMESTIC PRODUCT (GDP) 2017*, Fiji Bureau of Statistics.
- Fiji Ministry of Agriculture** (2015a), *2015 Agriculture Production Flow Chart*, Government of Fiji.
- Fiji Ministry of Agriculture** (2015b), *Crop Farmer's Guide*, Government of Fiji.
- Fiji Sun** (2016 Jun9), 'Call To Set Minimum Age For Kava Drinking At 20 Years.'



- Fiji Sun** (2017 May25), 'Kava In Our Markets Not Of Good Quality, Says Uraia Waibuta.'
- Fiji Sun** (2017 Aug17), 'Strong Demand For Kava.'
- Fiji Sun** (2018 Jun15), 'More Improvements Needed In Kava Sector.'
- Fiji Sun** (2018 Jun16), 'Domestic Market Dominates Kava Industry In Fiji.'
- Firth, R.** (1936), *We, the Tikopia: A Sociological Study of Kinship in Primitive Polynesia*, Boston: Beacon Press.
- Firth, R.** (1959), *Social Change in Tikopia: Re-study of a Polynesian Community after a Generation*, London: Allen & Unwin.
- Firth, R.** (1961), *Elements of Social Organization*, London: Watts. (正岡寛司監訳『価値と組織化－社会人類学序説－』早稲田大学出版部, 1978 年)
- Firth, R.** (1964), *Essays on Social Organization and Values*, London: Athlone Press.
- Meilleur, B.** (1998), 'Clones within Clones: Cosmology and Esthetics and Polynesian Crop Selection,' *Anthropologica* 40(1): 71-82.
- Ministry of Economy, Republic of Fiji** (2016), *DISASTER RECOVERY FRAMEWORK: Tropical Cyclone Winston, 20th February 2016*, Ministry of Economy, Republic of Fiji.
- OCHA** (2016 Feb27), *Fiji: Severe Tropical Cyclone Winston Situation Report No. 7*, UN Office for the Coordination of Humanitarian Affairs (OCHA).
- OCHA** (2016 Mar31), *Fiji: Severe Tropical Cyclone Winston Situation Report No. 20*, UN Office for the Coordination of Humanitarian Affairs (OCHA).
- OCHA** (2016 Feb-May), *Fiji TC Winston Flash Appeal FINAL*, UN Office for the Coordination of Humanitarian Affairs (OCHA).
- OCHA** (2016 Jun13), *TROPICAL CYCLONE WINSTON RESPONSE & FLASH APPEAL FINAL SUMMARY*, UN Office for the Coordination of Humanitarian Affairs (OCHA).
- PAPP** (2018), *KAVA IN FIJI*.
- PHAMA** (2018), *Fiji Kava Value Chain Analysis*.
- Pollock, N. J.** (2009), 'Sustainability of the Kava Trade,' *The Contemporary Pacific* 21(2): 265-297.
- RESERVE BANK OF FIJI** (2016Mar 11), *PRESS RELEASE 7/2016*.
- Singh, Y. N.** (2009), 'Kava: An Old Drug in a New World,' *Cultural Critique* (71): 107-128.
- Takahashi, R.** (2000), 'Going beyond inculturation and acculturation: Change, culture and Tikopia society,' *ER Osaka City University Economic Review* 36(1): 5-70.
- Takahashi, R.** (2005), *Habitus and Social Change in Fiji*, Thesis for PhD degree, University of Durham.
- Takahashi, R.** (2006), 'An examination of two views about a definition of culture,' *ER Osaka City University Economic Review* (41): 85-106.
- Tomlinson, M.** (2004), 'Perpetual Lament: Kava-Drinking, Christianity and Sensations of Historical Decline in Fiji,' *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 10(3): 653-673.

- Tomlinson, M. (2007), 'Everything and Its Opposite: Kava Drinking in Fiji,' *Anthropological Quarterly* 80(4): 1065-1081.
- Toren, C. (1990), *Making Sense of Hierarchy: Cognition as Social Process in Fiji*, London: Athlone.
- Turner, J. W. (2012), 'LISTENING TO THE ANCESTORS: KAVA AND THE LAPITA PEOPLES,' *Ethnology* 51(1/2): 31-53.
- Winterford, K. et al. (2018), *Humanitarian response for development in Fiji: lessons from Tropical Cyclone Winston*, International Institute for Environment and Development.
- シュムペーター, J. A. (1977a), 『経済発展の理論 (上)』 塩野谷祐一他訳、岩波書店。
- シュムペーター, J. A. (1977b), 『経済発展の理論 (下)』 塩野谷祐一他訳、岩波書店。
- 高橋玲 (2008), 『「場」の慣習行動に見られる相同性－フィジー社会の経済人類学的考察－』 大阪市立大学経済学研究科学位論文。
- 高橋玲 (2016), 「地域社会における偏倚的实践と正統性の変革－R.ファース、J.A.シュムペーター、C.ギアツ、P.ブルデューと経済人類学－」『大阪産業大学経済論集』 18(1): 57-79。
- 高橋玲 (2017), 「さまようフィジー人－相互扶助組織に現れる諸実践の文化的背景と近代的正統性の模索－」『大阪産業大学経済論集』 18(2): 1-22。
- 高橋玲 (2020), 「フィジーW村の17年－経済生活の近代化をめぐるインカルチュレーションと社会組織化の定点観測－」東京通信大学紀要(2): 51-68。
- 東裕 (2013), 「フィジー2013 年憲法草案の概要について」パシフィックウェイ(141): 18-30。
- ファース, R. (1978), 『価値と組織化－社会人類学序説－』 正岡寛司監訳、早稲田大学出版部。
- ブルデュー, P. (1988), 『実践感覚Ⅰ』 今村仁司他訳、みすず書房。
- ブルデュー, P. (1990a), 『実践感覚Ⅱ』 今村仁司他訳、みすず書房。
- ブルデュー, P. (1990b), 『ディスタンクシオン－社会的判断力批判Ⅰ』 石井洋二郎訳、藤原書店。
- ブルデュー, P. (1990c), 『ディスタンクシオン－社会的判断力批判Ⅱ』 石井洋二郎訳、藤原書店。
- ブルデュー, P. (1993), 『資本主義のハビトゥス－アルジェリアの矛盾－』 原山哲訳、藤原書店。

#### Fiji Bureau of Statistics HP

<https://www.statsfiji.gov.fj/index.php/census-2017/census-2017-release-1>

#### 外務省 HP

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/fiji/data.html#section1>

#### 国連統計

<https://unstats.un.org/unsd/snaama/Basic>

<sup>1</sup> フィジーの村には、独立した小屋や自宅の一面を利用して雑貨を売る「カンティーン (canteen)」がある。

<sup>2</sup> 筆者はこれら二つの要因に関する学会報告を行った（論題：「サイクロンウィンストン」がフィジーの一農村に与えた経済社会的インパクトおよび近代化をめぐる考察—ヤンゴーナ共飲儀礼とタロ芋生産に付与された新たな価値とその諸実践—[第 55 回経済社会学会 2019.9.7]）。このうち「漸次的かつ長期的な要因」とタロ芋に関する考察は[高橋 2020]で行った。

<sup>3</sup> 英名を「kava」、学術名を「*piper methysticum*」という。この植物の一般的な英語名は「kava」だが、フィジーでは「*yaqona*」と呼ばれている。太平洋一帯における栽培品種は 10~15 種程度ある [Meilleur1998: 73]。3~5 年で 4~6 フィートの高さの低木に成長し、地面から完全に引き抜いて収穫される [Singh2009: 109-110]。茎の根を乾燥した後に、「根の細いところ＝ワカ (*waka*)」と「根茎をスライスしたもの＝レウェナ (*lewena*)」として商品化される。本稿では特別な場合を除き、呼称を「ヤンゴーナ」に統一する。

<sup>4</sup> 2019 年の調査では戸別調査を行う時間的余裕がなかったため、2019 年時点での正確な W 村人口は不明である。

<sup>5</sup> W 村を構成するマタンガリは、「ナンガラニクラ (*Naqaranikula*=首長)」、「ガセレ (*Gasele*=使者)」、「ヴニヴトロ (*Vunivutoro*=戦士)」、「ブレニザヴァ (*Burenicava*=聖職者)」である。W 村の概要とライフスタイルについては [Takahashi2005: 79-127] 参照。

<sup>6</sup> 紙幅の関係で本稿では触れないが、R.K. マートン (R. K. Merton) の「中範囲の理論」、A. ギデンズ (A. Giddens) の「構造化」や「再帰性」、C. ギアツ (C. Geertz) の「会社経済」や「バザール経済」、そして、J.A. シュムペーター (J. A. Schumpeter) の「企業者」や「革新」などは、ファースやブルデューと近似的な視点をもっている。特に、ファース、ブルデュー、ギアツ、シュムペーターの諸概念における理論的関連について、筆者はかつて分析を行った [高橋 2016]。

<sup>7</sup> ティコピアは、ファースが調査したポリネシアの孤島であり、現在はソロモン諸島共和国の一部である。

<sup>8</sup> 「偏倚」については、[高橋 2016]で詳細に分析している。後述するブルデューの議論と併せて、ある「場」における「正統性」から偏りをもつ実践のことを、筆者は「偏倚的实践」として概念化してきた。

<sup>9</sup> いうまでもなく、「できる／できない」は概念上の極を表しているに過ぎない。現実の世界で個々人は、ある面では適応しながら、別の面では適応に苦しむといった形で、妥当な選択を求め続ける。

<sup>10</sup> 例えば UN Office for the Coordination of Humanitarian Affairs (OCHA) などの国際機関は、詳細かつ具体的なデータを災害直後から更新し、回復の過程を表している [OCHA2016 Jun13] が、それらと社会組織化との関連については言及していない。災害と組織化の変化に言及している研究は、T C ウィンストンが漁村のカニ漁に与えた影響と以後の組織化の変化を分析した [Chaston2016] など少数である。

<sup>11</sup> 熱帯低気圧の最高強度。「世界リスク指数 (World Risk Index)」(国連大学) では、フィジーの T C リスクは、171 国中 16 位である [Winterford2018: 10]。

<sup>12</sup> 内訳は、ウェスタンディヴィジョン 21 人、イースタンディヴィジョン 15 人、セントラルディヴィジョン 6 人、ノーザンディヴィジョン 2 人である [Winterford2018: 10]。

<sup>13</sup> [Esler2016: 15] 参照。ちなみに実際の成長率は予想を上回り、2.5% であった。被災年前後の GDP 成長率の推移は、4.7% (2015 年)、2.5% (2016 年)、5.4% (2017 年) であった [国連統計 (2020.2.15 閲覧)]。

<sup>14</sup> サトウキビ栽培は、19 世紀の英国領時代に「年季契約労働者制度 (indentured labourer)」が導入されたことでフィジーの主要産業になった。サトウキビに対する T C ウィンストンの影響は、それが植え付けシーズン中であったことから甚大なものになると予想された [Esler2016: 26]。

<sup>15</sup> フィジー農業省と協力してオーストラリアとニュージーランドが出資する「太平洋園芸・農業市場アクセスプログラム (Pacific Horticultural & Agricultural Market Access Program=PHAMA)」が行った [Fiji Sun2018Jun15]。

<sup>16</sup> この有機化合物は 15 種が同定されており、ヤンゴーナの生理的効果は、植物内の有効成分の濃度に依存する [PAPP2018][Singh2009: 110-111][Turner2012: 34]。

<sup>17</sup> フロリダに三か所、ノースカロライナに一か所、オレゴンに一か所、カリフォルニアに一か所ある。またハワイでは、ヤンゴーナ一杯の価格は比較的高く、400ml で US\$5 だったという [Baker2012: 245]。

<sup>18</sup> [Fiji Sun2017Aug17] 参照。2016 年には、ヴァヌアツから 94.2 トンのヤンゴーナを輸入しており、ヴァヌアツの輸入シェアは 100% であった [PHAMA2018: 68-69]。

<sup>19</sup> [PHAMA2018: 32] 参照。供給不足を補うべく、1 年半程度の未熟なヤンゴーナが流通することになった [Fiji Sun2017May25]。

<sup>20</sup> かつて試行した者もいたが、条件が厳しく断念した。

<sup>21</sup> 法的には、ヤンゴーナの年齢制限規定はないが、それを奨励する議論はある [Fiji Sun2016Jun9]。

---

<sup>22</sup> ヤンゴーナの根の細いところ。

<sup>23</sup> ヤンゴーナのスライスした根茎。

<sup>24</sup> フィジーでは「セヴセヴ」の儀式を経ると、異者は既存の親族関係を基にした社会組織の中に置かれる。彼女は筆者の「姪」であり、彼女は筆者を「叔父」と呼ぶ。[高橋 2008: 82-84]参照。

<sup>25</sup> 「アセンブリーズオブゴッド (Assemblies of God)」や「セブンスデーアドベンチスト (Seventh-day Adventist)」などの宗派では、ヤンゴーナを禁止している[Tomlinson 2007: 1068]。

<sup>26</sup> この論点については、別稿[高橋 2020]で詳しく分析している。

<sup>27</sup> 彼らの家には薄型テレビ、衛星放送、DVD プレイヤー、扇風機など、様々な耐久消費財がある。村ではかなり高位の生活水準である。

<sup>28</sup> モセセと、後述のライサニは、筆者のインフォーマントである。

<sup>29</sup> 当時、村にビリヤード台を設置する者が現れ、村では一種のブームが起きた。日中だけではなく夜になっても、若者を中心にビリヤードに熱中する者が増えていた。あるとき、首長世代が、夜のプレイを禁止した。若者たちは首長世代の苦言を尊重し、以後は、その遊びにも節度が生まれた。偏倚は裁可されなかったのである。[高橋 2008: 93]参照。

<sup>30</sup> 筆者はこの点に関して、ブルデューの言語論との関連で「リテラシー」概念の再構築を試み、学会報告を行った（論題：ブルデューの言語論から見た「リテラシー」と「情報」に関する一考察—フィジー農村における実践の諸相—[第 56 回経済社会学会 2020.10.11]）。

<sup>31</sup> 筆者[高橋 2016]はこの過程を J.A. シュムペーターの議論と関連付けて分析している。

<sup>32</sup> 2013 年に発効した新憲法の規定[東 2013: 23]に基づき、現政府は人権政策を強化している。

高橋 玲（たかはし りょう） 東京通信大学 情報マネジメント学部 准教授